



緊急時の連絡先確認

体調不良や予期せぬ事故など、注意していても避けられないことがある。自宅だけで対処しようとせず、受け入れ母体となった自治体や観光公社に速やかに連絡することが大切だ。担当者の夜間の連絡先なども事前に確認しておくといふ。



農家暮らし、泊まって体験

埼玉県では、自治体などが主体となって独自の「民泊」事業を展開している。農村部の民家が小学校から高校までの教育旅行を受け入れるというもの。農作業や夕食を一緒にすることで、都会とは違う暮らしに触れることができるため生徒には好評だが、受け入れる側には注意も必要だ。

自治体など、生徒向け「民泊」

「リンゴの木も見たことがない生徒がほとんど。農作業を手伝ってもらって新鮮に感じるみたい」。埼玉県秩父市在住で、リンゴ農家を営む長谷川衛さん（63）はうれしそうに思い出す。妻と祖母と暮らす長谷川さん宅では2014年からこれまで、6校の修学旅行生を受け入れた。京都、兵庫、東京・江戸川……。多くが都会で生まれ育った子どもたちだったという。

民家が1、2泊受け入れる。体験プログラムは民家がそれぞれ考案し、野菜の種まきや収穫、そば打ちや郷土料理作りを体験する。

この事業は、埼玉県が定めた「農山村での生活体験に伴う宿泊」に関する指針に基づいて実施されている。同指針によると、受け入れ民家では農作業の体験や料理と一緒に調理することなどを条件に、旅館業法や食品衛生法などの適用を受けないとしている。受け入れ民家に支払われる対価は「宿泊料」ではなく生活体験の「指導料」。民泊と銘打ってはいるが「宿泊料」を得るタイプの民泊とは違う。

秩父地域には長谷川さん宅の

ような受け入れ民家が200軒近くあり、昨年は5校、今年も既に6校が予定している。1校あたり200人以上の生徒が地域の民家に分かれて泊まる。

「お客さん扱いしないのが大事なポイント」。事業の旗振り役となった公社の井上正幸さんは受け入れ民家に対してこう説明する。小中学生とはいえ、他人を自宅に招き入れ

ば、もてなそうとしてしまうが、食事の片付けや掃除も家族の一員としてやってもらう。この民泊は「地域の文化を体験し、地元の人と交流すること」（井上さん）が目的なのだ。

季節にもよるが、長谷川さん宅はリンゴの収穫を手伝ってもらうことが多い。朝5時に起床し、ラジオ体操をしてから作業に取りかかる。なかなか起きない生徒もいるが、根気よく起こすという。長谷川さんは「知らない土地でこういう生活をしている家族もいるということを感じてほしい」と話す。生徒からは「今まで経験したことがない

ことができて楽しかった」という声も寄せられたそうだ。

受け入れる民家には、1人あたり1泊約5000円が観光公社を通じて支払われる。観光公社は生徒の受け入れ時に食卓に出す食事に地場産品を使うことを勧めており、地域への経済効果も期待できる。

受け入れに際してはトラブルが起きることもある。例えば女子生徒のお風呂。1時間以上も入浴してしまい、家の人が入れなくなった。また、生徒に「秩父ではシカやイノシシが出る」

と伝え、鳥獣が現れると期待して深夜に出かけてしまったこともあるという。おもてなし観光公社では、協力してもらう民家向けに「民泊受入の手引き」を作成し、気をつけるポイントを示している。注意事項は「各家庭と情報を共有しながら追加している」（井上さん）。

生徒との触れあいは民家にとってもいい思い出だ。これまで20人超を受け入れた岡田幸子さん（69）は「自分が育てた子とはまた違った若い人たちから力がもらえる。私たちも楽しい」と声を弾ませていた。

（さいたま支局 須賀恭平）

受け入れの際に注意する主なポイント

	理由
入浴は全員で1～1.5時間で	指示がないと長時間に及ぶケースも
お土産は原則渡さない	各家庭でお土産の量や質が異なり、生徒に不平等感を与える
受け入れ中の民家同士の交流	家の広さや農作業の大変さが異なり、生徒に不平等感を与えることも
異性への注意は口頭のみで	セクハラなどのトラブル防止
生食は食卓に出さない	食中毒の防止
鳥獣は危険だと伝える	動物園をイメージして見に行ってしまう
内服薬は飲ませない	事前にわからないアレルギーがある可能性